

所取の形象と能取の形象についてのケードゥプジェ の解釈

村上 徳樹

1 はじめに

インドの仏教論理学の文献では所取の形象 (grāhyākāra/ gzung ba'i rnam pa) と能取の形象 (grāhakākāra/ 'dzin pa'i rnam pa) という用語が頻出する。特に自己認識などの認識の問題が扱われる文脈で多用される。ゲルク派の学僧ケードゥプジェ・ゲレクペルサンポ (mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1385-1438, 以下ケードゥプジェ) によれば、この所取の形象と能取の形象には、真 (mtshan nyid pa/ dngos) と仮 (btags pa ba) との二つの意味があり、文脈に応じてその意味を区別する必要があるとされる⁽¹⁾。

このようにケードゥプジェが述べる背景には、それら所取の形象と能取の形象についてケードゥプジェとは異なった見解をサキャ派の論師が有しており、それに対して自説の正当性を打ち立てようとした意図が見受けられる。また、彼が実際にインドの文献を注釈する際に、その所取の形象と能取の形象とが自己の体系とは異なった意味で使用される場合があり、その解釈を説明するために、このような分類を示す必要があったと考えられる。

本稿では、所取の形象と能取の形象およびそれに付随した自己認識と他者認識の解釈について、サキャ派の論師とケードゥプジェの解釈を対比的に考察して両者の見解の差異を明確化することを目指したい。考察の手順として、まずサキャ派の解釈として、ケードゥプジェの主要な批判対象の一人であったと考えられるロントウン・シャーキャギェルツェン (Rong ston Shākya rgyal mtshan, 1367-1449, 以下ロントウン) の所取の形象と能取の形象との解釈、およびそれと関連した自己認識と他者認識の解釈を提示する。次に、ケードゥプジェの所取の形象と能取の形象について解釈を考察し、両者の見解の差異を明確にする。最後に、両者の自己認識と他者認識の解釈の相違を検討したい。

2 ロントウンの解釈

(1) 所取の形象に対する自己認識説

ロントウンの解釈では、自己認識に二種類あるとされる。一方は所取の形象に対する自己認識であり、もう一方は能取の形象に対する自己認識である。また、その二種類の自己認識は経量部と唯識派に共通のものとされる⁽²⁾。その内の所取の形象に対する自己認識をまずは見てみよう。

所取の形象に対して自己認識となる形式 (gzung rnam la rang rig du 'gro tshul)

——所取の形象と能取の形象についてのケドゥブジェの解釈——

は、〔以下の通りである。〕単一の知が習気の力により、所取の形象と能取の形象という二相 (tshul gnyis) としての顕現として生じる。〔そのうちの〕所取の形象は青の形象である。能取の形象はそ〔の青の形象〕を把握する知のようなものであるので、〔青の形象に対して自己認識となる〕時、青の形象は異なりの側面から (ldog pa'i cha nas) 〔さらに〕二つに分けられる。すなわち、存在の仕方 (gnas tshul) に関して知であるもの〔という異なりの側面〕と、顕現の仕方 (snang tshul) に関して対象として顕現しているもの〔という〕異なりの側面とである。

その〔二つの側面の〕うち、顕現の仕方の側面に対して〔眼識に〕後続する確定知 (rjes kyi nges shes) が、〔認識した青の形象は外界の〕対象であると思い込む (mngon par zhen pa) ために〔外界の対象を〕認識しているという異なりにより〔青の形象の認識は〕対象認識と述べられる。(…)〔他方〕存在の仕方〔の側面について〕は、〔青の形象は〕認識する知自身と一体のもの (shes pa rang gi bdag nyid) である。なぜならば、〔青の形象は〕それ (知) と必ず同時に知覚されるからである。(…)従って、知が〔所取の形象と能取の形象という〕二相として生じた時、所取の形象の側面である青のような、知自身と一体のものが対象として顕現している。その時、そ〔のような青の形象の認識〕を自己認識と述べるのである (*Rigs gter R*, 162a6-b4)。((…)は中略を示す)

眼識が青の形象を認識する場合、その青の形象は顕現の仕方 (snang tshul) の側面では外界の青として顕現している。しかし、実際の存在の仕方 (gnas tshul) の側面では知と一体のもの (shes pa rang gi bdag nyid) である。青の形象の認識が対象認識として設定されるのは、眼識に後続する確定知 (nges shes) によって、眼識が認識した青の形象は外界の青であると思い込まれることによりそのように設定されるのである。しかしながら、実際に眼識が認識しているのは知と一体の青の形象であるので、その認識は自己認識となる。これが、所取の形象に対する自己認識説である。この解釈では、青などの対象の形象が所取の形象であると解釈されている。

(2) 能取の形象に対する自己認識説

次に能取の形象に対する自己認識を、ロントウンは次のように述べている。

能取の形象に対して自己認識となる形式 ('dzin pa'i rnam pa la rang rig du 'gro tshul) は、青を把握する眼識を経験する自己認識知覚が、それ (能取の形象) に対して自己認識となるような〔場合〕である。青を把握する眼識が青を認識する時、青を認識するものが存在することと同様に、青を把握する眼識 (能取の形象) に対しても認識するものが必要である。〔その認識するものは〕自己を認識するところのもの (rang rig gi ngo bo) 以外の別の認識するものを探し求めても〔そのようなものは〕存在しない。従って、〔眼識それ〕自身が〔自己を〕認識する (rang gis rig pa) と成立するのである (*Rigs gter R*, 162b5-6)。

——所取の形象と能取の形象についてのケードゥブジェの解釈——

この自己認識説は、所取の形象に対する自己認識説と異なり、眼識が眼識それ自身を認識する自己認識説である。ロントウンによれば、この自己認識は想起 (dran pa) に基づいて導きだされる。すなわち、想起は過去に経験したことを思い起こすのであり、経験していないこと思い起こすことはない。もしも眼識に経験するものが存在していないならば、その眼識を思い起こすこともない。よって、眼識が青の形象を認識した時に、その眼識を経験する知が存在していなければ、眼識が青の形象を認識したと想起することはありえないことになる (*Rigs gter R*, 162b6–163a2)。また、そのように眼識に認識するものが存在するとして、その眼識を眼識以外の知が経験するとしても過失が付随してしまい、眼識それ自身以外に過失のない知は得られない。従って、眼識自身が自己を認識していると成立することになる (*Rigs gter R*, 163a3–6)。これが能取の形象に対する自己認識説である。この解釈では青を把握する眼識が能取の形象であると理解されている。

3 ケードゥブジェの解釈

以上のように、ロントウンは所取の形象と能取の形象をそれぞれ対象の形象とその形象を把握する知であると解釈している。それに対して、ケードゥブジェはそのような青の形象やその青の形象を把握する眼識は真の所取の形象と能取の形象ではなく、またその所取の形象と能取の形象に基づいた自己認識の解釈にも過失が付随すると批判する。それでは、ケードゥブジェにとって所取の形象と能取の形象とは何であり、さらにそれが他者認識と自己認識とどのように関連しているのか。

まず、真の所取の形象は眼識などの他者認識を意味している。ロントウンによれば、所取の形象は対象の形象であり、それが知の対象となると解釈されていた。それに対して、ケードゥブジェは所取の形象は対象の形象として生じている知自身であると解釈している。

所取の形象というのは、対象の形象として生じている知自身 (shes pa nyid yul gyi rnam par skyes pa) である。〔それはまた、〕対象と相似しているもの (yul dang 'dra ba) と表現される。〔例えば、〕最高に透明で汚れのない白水晶が、青や赤といった多様な〔色彩の〕衣服と近接していることにより、水晶自体も斑を自性としているかのように生じることと同様である (*Tshad 'bras rnam gzhag*, 9b6–7)。

青を把握する眼識を例えとするならば、所取の形象は青の形象として生じている眼識であり、青の形象が所取の形象ではない。このように所取の形象は知の対象となるものではなく、対象を把握する知自身であることをケードゥブジェは自己の著作で繰り返し強調してのべている (*Tik chen*, 116a6–7. *Tshad 'bras rnam gzhag*, 11b4–6. *Yid kyi mun sel*, 64a4–66b6, 94a3–6. Dreyfus 1997, 408)。それは前章で見たように、ロントウンなどのサキャ派の論師が所取の形象を知の対象となる形象であると解釈していたことに対する批判なのである。

真の能取の形象は、そのような所取の形象を経験する自己認識である。それは myong ba

——所取の形象と能取の形象についてのケードゥブジェの解釈——

gsal rig とケードゥブジェにより表現されている。

真の能取の形象は、個々の全ての知にある myong ba gsal rig の側面であり、内側のみを向く (kha nang kho na la phyogs pa) 「所取の形象を」経験することを本性とするものであり、水晶の透明な側面のようなものである (Tshad 'bras rnam gzhas, 10a4-5)。

この myong ba gsal rig という術語は翻訳しづらい表現である。意味的には myong ba であり、gsal rig であるものと分解される。myong ba というのは、能取の形象が所取の形象を経験するものであることを表示するために述べられている。gsal rig というのは知の定義である gsal zhing rig pa の略語である。能取の形象である自己認識が、物質以外の全ての知に共通に存在しており、それが存在していないならば知であると述べることができないことを表示するためにこのように表現されている。ケードゥブジェの認識論の体系では、このような所取の形象と能取の形象が、単一の知に二つの側面 (cha gnyis) として存在しており、眼識などの他者認識たる所取の形象を能取の形象が経験することを自己認識として解釈している。

ケードゥブジェが断りなく所取の形象、能取の形象と述べる時には、このように所取の形象が他者認識を、能取の形象が自己認識をそれぞれ含意して述べている。他方、仮の所取の形象と能取の形象は、青とその青を把握する眼識でいえば、青が所取の形象であり、その青を把握する眼識が能取の形象である⁽³⁾。この所取の形象と能取の形象との関係は、いわゆる「所取と能取が別体として顕現する (gzung 'dzin rdzas gzhan du snang ba)」という時の所取と能取に相当するものである⁽⁴⁾。

ここで、両者の所取の形象と能取の形象の解釈をまとめれば、次のようになる。

【ロントウンの解釈】

- ・ 所取の形象＝青の形象
- ・ 能取の形象＝眼識

【ケードゥブジェの解釈】

- ・ 仮の所取の形象＝青
- ・ 仮の能取の形象＝真の所取の形象＝眼識
- ・ 真の能取の形象＝自己認識

両者の解釈を対比的に見れば、ケードゥブジェによる仮の所取の形象と能取の形象の解釈が、ロントウンによる所取の形象と能取の形象の解釈に近い。ただし、能取の形象は眼識などの知であり両者の解釈は一致しているが、所取の形象についての解釈が異なっている点に注意したい。ロントウンは所取の形象を青などの対象の形象であり、それは顕現の仕方の側面では外界の対象として顕現しているが、他方、存在の仕方の側面では知と一体のものであると二面性を持つものとして理解していた。それに対して、ケードゥブジェは仮の所取の形

——所取の形象と能取の形象についてのケードゥプジェの解釈——

象を、他者認識に対して外界に隔たっているかのように顕現している青であり、それが知と一体のものであるとは解釈していない。この解釈の相違が、次節でみるように、両者にとって自己認識と他者認識の解釈の相違を生み出していると考えられる。

4 ケードゥプジェによる唯識派の他者認識の解釈

はじめに述べたように、ケードゥプジェはインドの文献を注釈する際に、所取の形象と能取の形象とが彼の体系とは異なった意味で用いられる場合があり、その解釈を説明するために、仮の所取の形象と能取の形象という分類を持ち出して自己の解釈を示している。それは次のような箇所である。

〔唯〕識論者にとって、対象として思い込まれている (don du zhen par byas pa) 所取の形象が所量。能取の形象が量。所取の形象の認識、〔つまり知〕自体の自性の認識を本性としているけれども (rang gi rang bzhin rig pa'i bdag nyid yin yang)、所取の認識に他ならないものとして確定されるものが (nges pa) 果である (PVin T, 148a5-6) (5)。

これは、PV III 340 に相当する PVin (88, 15-17) についての注釈箇所である。ケードゥプジェは福田 (1988) で論じられているように、PV III 338-353 を唯識派の他者認識を説くものとして解釈する。それと同様に、PV III 340 と平行関係にある同箇所を、唯識派の他者認識を説くものとして解釈しようとしている。この箇所を、ロントウンの所取の形象に対する自己認識説と比較して、両者の自己認識と他者認識の相違について考察したい。

ここで所取の形象とあるのをいかに解釈するかで、両者に見解の相違が生じている。ロントウンの解釈では、所取の形象は青の形象のような対象の形象であり、その形象は存在の仕方の側面では知と一体のものである。よって、その形象の認識は自己認識となる。他方、顕現の仕方の側面では対象の形象は外界の対象として顕現しており、そのように顕現している形象が、後続する確定知によって外界の対象であると思い込まれる。従って、その認識は対象認識であると解釈されるはずである⁽⁶⁾。彼の解釈では、所取の形象を対象の形象として解釈し、それに顕現の仕方の側面と存在の仕方の側面という二つの観点を設けることにより、その所取の形象に対する認識を自己認識とも対象認識とも解釈可能にしている。

このようなロントウンの主張に対して、ケードゥプジェは次のような反論を提示している。

青を把握する眼識は、〔眼識〕自身の実体 (rdzas) となっている青の所取の形象を二顕現が没した仕方で (gnyis snang nub pa'i tshul gyis) 認識するのか、それとも二顕現〔を有した〕仕方で (gnyis su snang ba'i tshul gyis) 認識するのか (Tshad 'bras rnam gzhaq, 8b3-4)。

まず、眼識が自己と一体となっている青の形象を二顕現が没した仕方で認識するならば、その認識は自己認識となる。しかし、そうであるならば、後続する確定知が形象を外界の対

——所取の形象と能取の形象についてのケードゥブジェの解釈——

象であると思ひ込む機能は損なわれることになる。さもないれば、眼識を経験する自己認識が眼識を二顯現が没した仕方では認識したとしても、後続する確定知により、その眼識が認識したものは外界の対象であると繰り返し思ひ込むことになり、その認識は自己認識とも他者認識とも言えなくなる (*Tshad 'bras rnam gzhaḡ*, 8b4-5)。

他方、二顯現を有した仕方では認識するならば、対象の形象は存在としては眼識自身と一体のものであるにもかかわらず、顯現の仕方では眼識と別のものであるかのように顯現しているのであるから、経量部の学説において、その認識は顯現対象に対して錯誤していることを認めざるをえない (*Tshad 'bras rnam gzhaḡ*, 9a5-7) ⁽⁷⁾。また、経量部の学説であれ、唯識派の学説であれ、知に昇っている対象の形象を認識することが、その対象を認識することであるならば、その対象の形象を認識するためにさらに対象の形象の形象を認識しなければならない。さらに、その対象の形象の形象を認識するためには、対象の形象の形象の形象を認識しなければならない。従って、知に昇っている対象の形象の認識を、その対象を認識するための前提とするならば、際限なく知に昇ってくる形象を認識しなければならないことになる (*Tshad 'bras rnam gzhaḡ*, 9b2-9b5)。

このように、所取の形象を対象の形象と解釈するならば、二顯現の有無を問題とした場合に経量部と唯識派のいずれの学説に対しても過失が付随することになる。それに対して、ケードゥブジェはここで所取の形象、能取の形象とあるのを仮のそれらとして解釈し、唯識の他者認識を説くものと理解している⁽⁸⁾。前章で仮の所取の形象と能取の形象を、所取と能取が別の実体として顯現する関係であると述べたが、この関係が唯識派の自己認識と他者認識を峻別する分節点であるとケードゥブジェは主張する。

経量部は〔知〕自身と別体〔となっている〕対象の認識 (*don gzhan pa'i yul rig pa*) であるか、〔知〕自身と一体となっている対象の認識 (*rang gi bdag nyid du gyur pa'i yul rig pa*) であるかの点から自己認識と他者認識を設定する。しかし、こ〔の唯識派〕においては、そ〔のように自己認識と他者認識を設定し〕ない。なぜならば、青なども〔青などそれ〕自身を把握する眼識などと一体のものであると承認するからである。従って、〔所取と能取との〕二顯現を伴っているか、二顯現が存在しないかの点から (*gnyis snang dang bcas pa dang gnyis snang med pa'i sgo nas*) 対象を把握する〔認識〕を他者認識と自己認識の違いであると認めるのである (*Tik chen*, 66b6-67a1) ⁽⁹⁾。

外界の対象を承認する経量部の学説において、知と一体となっている対象を認識しているか否かで自己認識と他者認識は区別される。他方、唯識派の学説において、外界の対象は存在せず、全ての対象は知と一体のものである。従って、知と一体となっている対象であるか否かでは自己認識と他者認識を区別することはできないことになる。しかしながら、経量部とは異なった唯識派独自の自己認識と他者認識を峻別する基準が存在するとケードゥブジェは主張する。それが二顯現 (*gnyis snang*) の有無である。

——所取の形象と能取の形象についてのケードゥプジェの解釈——

ロントウンの解釈では、経量部の学説であれ唯識派の学説であれ、対象の形象は存在の仕方
の側面では知と一体のものであり、その形象の認識は自己認識であると解釈される。しか
しながら、ケードゥプジェの解釈では、唯識派の学説において、知と一体となっている対象
であっても、所取と能取の二顕現が存在する限りその認識は他者認識である。それ故に、こ
の箇所の所取の形象と能取の形象を仮のそれらと解釈した場合には、唯識派の他者認識を説
くものとして理解することになるのである。

しかしそれではなぜ、対象が知と一体となった対象であるにもかかわらず、外界に隔たっ
ているかのように顕現している青が認識対象であるのか。つまり、認識対象が知と一体と
なった対象であるならば、対象を他者認識に対して外界に隔たっているかのように顕現し
ている青と設定することはできないのではないのか。ケードゥプジェは次のように述べて
いる。

凡夫の青を把握する眼識は、〔知〕自身と一体となっている青を理解するが、青が知
自身と一体のものであること (sngon po shes pa rang gi bdag nyid yin pa) を理解す
るのではない。唯識の学説において、凡夫の青を把握する眼識は青に対して言説を考察
する量 (tha snyad dpyod byed kyi tshad ma) なのであり、勝義を考察する量 (don
dam dpyod pa'i tshad ma) ではない (*Tshad 'bras rnam gzhaq*, 31a4-5)。

凡夫の眼識は、知自身と一体となっている青を認識しているのであるが、その青が知自身
と一体のものであることを理解するのではない。対象は単に青として顕現しており、その青
を凡夫の眼識は認識するだけである。その青が知と一体のものであることを理解するわけ
ではない。同様に、唯識派の学説においても、凡夫の眼識は青が知と一体のものであること
を理解するのではなく、青として顕現している対象に対して、単に青であると認識する言説を
考察する量なのである。その青が知と一体のものであると理解するためには勝義を考察する
量による検証が必要である。よって、勝義としては、認識対象は知と一体となっている対象
であるけれども、言説としては凡夫の認識それ自体は知に顕現している青を認識しているだ
けなのである。それ故に、その認識対象は他者認識に対して外界に隔たっているかのように
顕現している青と設定されるのであり、この箇所の所取の形象もそのように解釈されるので
ある。

5 まとめ

以上考察した結果をまとめれば次の通りである。

1. ロントウンとケードゥプジェは所取の形象と能取の形象に関して解釈が異なっている。
ロントウンは青などの対象の形象が所取の形象であり、能取の形象はその対象の形象を
把握する眼識などの知であると解釈している。他方、ケードゥプジェは眼識などの他者
認識が所取の形象であり、その他者認識を経験する自己認識が能取の形象であると解釈
する。ケードゥプジェの言う仮の所取の形象と能取の形象とは、ほぼロントウンの所取

—所取の形象と能取の形象についてのケードゥプジェの解釈—

の形象と能取の形象とに相当している。ただし、能取の形象は眼識などの知であり両者の解釈は一致しているが、所取の形象についての解釈が異なっている。ロントウンは所取の形象は青などの対象の形象であり、それは顕現の仕方の側面では外界の対象のように顕現しており、存在の仕方の側面では知と一体のものであると理解している。他方、ケードゥプジェは仮の所取の形象を、他者認識に対して外界に隔たっているかのように顕現している青であり、それが知と一体のものであるとは解釈しない。

2. ロントウンとケードゥプジェは、PVin Tについて、所取の形象の解釈の相違により、自己認識と他者認識の解釈を異にしている。ロントウンは所取の形象を青の形象のような対象の形象と解釈し、それに存在の仕方の側面と顕現の仕方の側面という二つの観点を設けることにより、その形象の認識を自己認識とも他者認識とも解釈可能にしている。つまり、顕現の仕方の側面では形象は外界の対象として顕現しており、その認識は他者認識となるが、存在の仕方の側面では形象は知と一体のものであるので、その認識は自己認識となると解釈する。それに対して、ケードゥプジェは所取の形象を彼の体系内で仮の所取の形象として解釈し、他者認識に対して外界に隔たっているかのように顕現している青と捉え、あくまでも唯識派の他者認識を説くものとして理解する。彼の解釈では、唯識派の自己認識と他者認識を区別する基準として所取と能取との二顕現の有無があり、知と一体となっている対象の認識といえども、所取と能取とが分裂している限りその認識は他者認識であると主張する。また、認識対象が知と一体となっている対象であるにもかかわらず、外界に隔たっているかのように顕現している青と設定されるのは、凡夫の認識が問題とされていることにより、そのように設定しなければならないと解釈している。

略号表

- D sDe dge bstan 'gyur.
- PV Dharmakīrti. *Pramāṇavārttika*. In *Pramāṇavārttika-Kārikā (Sanskrit and Tibetan)* Ed. Miyasaka. (Acta Indologica II) . 1971-1972.
- PVin Dharmakīrti. *Pramāṇaviniścaya*. In *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, 1. Kapital: Pratyakṣam*. Ed. T. Vetter. (Sitzungsberichte, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Bd. 287, Abh. 4) . Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 1966.
- PVinT Dharmottara. *Pramāṇaviniścaya-tīkā*. D No.4229.
- Rigs gter R Rong ston Shākya rgyal mtshan. *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rnam bshad nyi ma'i snying po*. In *The Collected Works of Rong-ston Shak-kya rgyal-mtshan*, Volume-A. (ka) . Rajpur: Sa skya rgyal yongs gsung rab slob gnyer khang, 1999.
- Tshad 'bras rnam gzhaḡ mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po. *Tshad 'bras kyi rnam gzhaḡ chen mo*. Tohoku No.5507. bKra shis lhun po ed. (tha) .
- Tik chen mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po. *rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel*

——所取の形象と能取の形象についてのケードゥブジェの解釈——

gyi rgya cher bshad pa'i rigs pa'i rgya mtsho las mngon sum le'u'i rnam bshad. Tohoku No.5505 (C) . bKra shis lhun po ed (ta) .

Yid kyi mun sel mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po. *Tshad ma sde bdun gyi rgyan yid kyi mun sel*. Tohoku No.5501. bKra shis lhun po ed. (nya) .

文献表

Dreyfus, G.

1997 *Recognizing Reality, Dharmakīrti's Philosophy and its Tibetan Interpretations*. New York: State University of New York Press, Albany.

戸崎 宏正

1993 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第1章現量（知覚）論の和訳（9）」、『哲学年報』第52号、pp.1-14.

福田 洋一

1988 「ケードゥブジェの『プラマーナ・ヴァールティカ』註釈における自己認識と他者認識の設定方式について」、『日本西藏学会々報』第34号、pp.8-15.

注

- (1) ここでそれぞれ「真」と「仮」と訳している *mtshan nyid pa* または *dnegos* と *btags pa ba* について説明しておきたい。ケードゥブジェの用語法では、一般的に *dnegos* と *btags pa ba* が対をなして用いられる。例えば、推理に関して次のような議論がある。「（反論）最初に推理の定義を説かないで、〔推理の〕分類を先に説く理由はなぜか。（答え）自己のための推理は真（*dnegos*）〔の推理〕であり、他者のための推理は仮の推理（*rjes dpag btags pa ba*）である。従って、真と仮の二つの推理（*rjes dpag dnegos btags gnyis ka*）に共通にあてはまる推理の定義（*mtshan nyid*）は存在しないので〔分類を先に説いたのである。また他者のための推理に〕推理の定義があてはまるならば、〔それは〕仮の推理として矛盾するからである（*Yid kyi mun sel*, 116a3-5）。」推理には自己のための推理と他者のための推理とがある。そのうち、真に推理とよべるのは定義があてはまる自己のための推理のみであり、論争法たる他者のための推理は、定義のあてはまる真の推理ではない。それは仮に推理と名前が付けられただけのものである。このような議論から、*dnegos* または *mtshan nyid pa* は定義があてはまるものであり、*btags pa ba* は定義があてはまらず、単に名前が付けられたにすぎないものであることが理解できる。実際、ケードゥブジェは仮の所取の形象と能取の形象とを、語の語源上の根拠（*sgra bshad pa'i rgyu mtshan/ śabdavyutpattinimitta*）に基づいて、単にそのように名前が付けられたにすぎないもの（*tha snyad btags pa tsam*）と解釈している（*Tshad 'bras rnam gzhas*, 10a7-10b3）。本論文で扱う議論が形象に関する問題であることから、形象真実（*rnam bden*）と虚偽（*rdzun*）の議論と訳語上紛らわしいが、以上のような理解のもと、本稿では訳語を「真」と「仮」に統一しておきたい。
- (2) 「自己認識の量果〔の設定〕は経量部と唯心派の両学派に共通のものである。（*Rigs gter R*, 177b3）」

—所取の形象と能取の形象についてのケードゥブジェの解釈—

- (3) 「色が、把握作用の働く基体となっている把握される部分として、外界において〔知より〕外に隔たっているかのように顕現しているもの (phar chad ba lta bur snang ba) を、単に語の語源上の根拠 (sgra bshad pa'i rgyu mtshan) だけに基づいて所取の形象と表現なさっている。〔他方、〕その時に〔眼識の周囲に存在している〕楽や苦といった感受は、好ましいもの、好ましくないものとして顕現している色を把握する作用をなし、〔その色を〕把握する部分として、あたかも〔認識〕内部において内に隔たって存在しているかのように顕現している (nang na tshur chad par gnas pa ltar snang ba) ことにより、単に語の語源上の根拠だけに基づいて能取の形象と表現なさっている (Tshad 'bras rnam gzhaḡ, 10b1-2)。」

なお、ここでケードゥブジェが仮の所取の形象と能取の形象が「語の語源上の根拠 (sgra bshad pa'i rgyu mtshan/ śabdavyutpattinimitta)」に基づいて名前が付けられているにすぎないと述べているのは、それらが、文字通りに「把握される形象」「把握する形象」と解釈できることを示している。その反面、真の所取の形象と能取の形象は文字通りに解釈できないことを意味しており、ケードゥブジェの解釈の特異性を伺わせるものである。

- (4) 「このように、把握される〔対象〕が外に隔たって (phar chad pa) 〔いるかのように顕現すること〕と、把握する〔主体〕が内に隔たっているかのように顕現すること (nang na tshur chad pa ltar snang ba) を所取と能取が別体〔として〕顕現する (gzung 'dzin rdzas gzhan snang ba) と述べるのである。(Tshad 'bras rnam gzhaḡ, 10b4-5)」
- (5) この箇所は戸崎 (1993, 5-6, n.24) に訳されている。
- (6) ケードゥブジェは次のような反論をあげている。「この箇所で、対象として思い込まれている所取の形象を所量と説かれていることも、そのような所取の形象を所量としてお説きになられているのであり、そのような所取の形象が後続する分別知 (確定知) により〔外界の〕対象であると思込まれるならば、存在の仕方 (gnas tshul) においては、自己を認識するその眼識と一体のもの (rang rig pa'i mig shes de'i bdag nyid) であるので、果もこの箇所でそのように説かれたのである、とある者が疑うことになるならば (Tshad 'bras rnam gzhaḡ, 8b2-3)」このケードゥブジェが立てる反論はロントウンの所取の形象に対する自己認識説と一致している。ただし、*Rigs gter R* には同箇所についての彼の解釈は見られず、ケードゥブジェが想定して立てた反論であると考えられる。
- (7) 経量部の学説についてはこのような批判が適用される。他方、唯識派の学説では、二顕現の習気により認識対象は知と一体のものであるにもかかわらず、別体であるかのように顕現しているので、そのような対象を認識する知は錯誤していることになる。よって、このような批判は唯識派の学説にはあてはまらない (*Yid kyi mun sel*, 57b6-7. 福田 1988, 11)。
- (8) ケードゥブジェはこの箇所を次のように注釈している。 (「」は P Vin T の原文) 「〔唯〕識論者にとって」、自説である不共の感官知覚の量果の設定は、「所取の形象」、つまり把握されるものとして外に隔たった形象として顕現している (gzung byar phar chad pa'i rnam par snang ba)、言説知によって、「対象として思い込まれている」青「が所量」。「能取の形象」、つまり把握する主体として内に隔たった形象として存在しており ('dzin pa bor tshur chad pa'i rnam par gnas pa)、その所量の形象として生じてから、そ〔の所量〕に対して増益を新たに断ちきる知覚「が量」。「所取の形象」、つまり把握される部分として外に隔たっているかのように顕現している青を顕現対象 (snang yul) として「認識」するものまたは理解するものは、知「自体の自性の認識を本性としているけれども」、言説知によって「所取」である青「の認識に他ならないものとして確定されるものが果である」 (Tshad 'bras rnam gzhaḡ, 8a2-4)。
- (9) ケードゥブジェによる、このような経量部と唯識派の自己認識と他者認識の設定方式は福田 (1988, 13) により既に指摘されている。